

# 柳土ほんのろ

第6号

消えし峠

吉田朝夏

借風根にうしろんばてふは米の道

道迎は段父継の炭負女

もふし嘆も歳腸消えし峠道

奥人の列春雪を染し峠

まうとうし避けで隠れし洞の冷を

## 名栗街道交通の草分け

## 本橋藤太郎氏(原市場)

西村一男

今ではすっかり整備された名栗街道を、近代的なバスが日には七十本も上り下りし、ダンブが風を巻いて疾走、朝夕は高級マイカーが列をなす。

だが、この街道もかつては、明治末から昭和初期まで、砂利を砕きながら走る鉄輪の馬車が唯一の交通機関であった。

飯能の市街地から約十キロ、原市場の宿へ入る宮の瀬橋畑中際には佐久間某なる人物の経営するテト馬車の事務所があった。二頭の馬で、原市場・飯能間を一日二往復ぐらい運行されていたようだが、経営不振から明治末には一切を身売りして他へ移った。このとき、権利等すべてを、一千円也で買収したが、のちに名栗街道交通史上に名を残した「本橋藤太郎」氏(原市場四七八・当主藤治氏祖父)であった。

藤太郎さんは、日露戦争に従軍、砲兵として旅順攻撃に出陣、のちに金理勲章を受けた勇士だ

った。馬の扱いには馴れており、父の仲次郎さんが荷馬車の運送業をしていたこともあって、馬車経営に着想したものらしいと藤治氏はいう。

当時は、原市場・飯能間だったが、古者の記憶では全線運賃が十銭だったという。これが本橋さんの経営になってから若干値上げされたらしいが、時代の進歩で乗客数も増え、馬も客車も次第に増し、最盛期には馬は八頭にもなった。飯能側もそれまでの折り返し点だけでなく、人や馬も常駐させ、当然ダイヤも増発とされた。路線も名栗村まで延長、初めの浅海道までやがて森河原まで伸びた。客車は御者・別当(馬丁)のほか、乗客十四、五人乗りで、後部が乗車時間が近づくと、例のラツバが「テト・テト」と鳴らされ、その辺に寄り込んでおしやべりしていた乗客が集まってくる。原市場を出て途中、久須美までくると一と休み。今日の

ドライブインに、馬に水をやり、車内へは茶店の方がお茶を持っ

て入ってくる。欲しい者は一銭銅貨を一つ蓋の上に置いて茶を吸る。普通、馬は差足で飯能まで約三十分、急用の客が乗り合

わせればそれなりにスピードアップもしてくれた。乗客券もなければ、停留所もなく、途中で買物があればその店の前で止めて待つてくれる。ずいぶんと

融通の利いた乗物でもあった。経営成功の陰には、本橋さんの手廻もさることながら、地場

産業の好景気にも支えられていた。当時の原市場には、旅館・銀行などのほか、常設の娯楽施設「原市場館」があり、

料亭もこの立て場付近だけでも三軒あって、芸者も含む十四、



入間道貨自動車観光地御案内

五人の女は常にいた。川畔の料亭には泊り込みで、盃片手に窓下の河原で組む筏の采配を振る。豪商の姿もしばしば見られたという。毎朝、八十台からの手車と、五、六十台の荷馬車が薪炭や木材を満載して飯能へと通過していった。これらの車が帰りに、上げ荷」とどいて、飯能の商店から買い集めた穀物や肥料・石油・その他日用必需品を積んで戻ってくる。みんなこの立て場近辺で休んだのは最後の丁場にかかるとであった。千住・深川まで下った筏師も、遊び上手なのはこままできて、シケ込むのもいたという。また、これら筏師や運送業者らによって、都会の情報や文化は直にもたらされたというこもあって、山間とはいえず、意外に進んだ一面もあつたようだ。産業としてのこの当時は、一時ではあつたが、輸出向け鉄砲、百合の栽培があつた。『百合景気』とまで今に語られるほどの爆発的な景気だつたという。その余勢で原市場館も出来たものだといふ。

だが、時代の波は容赦なく押

し寄せ、自動車という文明の利器が自動車の前には、時間・運賃の差で比較ではない。実業家本橋藤太郎がこの転機を見逃す筈はなく、逸早く乗合自動車を購入、馬車と併せて走り路線を「入間バス」の名で定めた。馬車も振動の少ないゴム輪の新型車を入れた。しかし、馬よりも早く、乗り心地のよい自動車に人気は集中、時の流れを示した。その後、本橋さんがバスの経営権を名栗の柏木氏へ譲渡したのは昭和十年頃。柏木氏による「名栗バス」となり、戦後一時期「飯能交通」となったものの「国際興業バス」となったものである。

定期バスを手放した本橋さんはトラックに切り替えて客木を運び、タクシーで緊急の客に応え、遊覧バス(観光)で旅行者を案内するなど、本橋自動車商會として、常に時代の最先端をいく企業家であった。やがて太平洋戦争に突入、昭和十八年には大・小運送業者が統合されて武蔵貨物となり、本橋家個人による運輸業には終止符が打たれた。昭和三十五年改

## 飯能の自然雑感

# 春の野草を訪ねる

横田 稲吉

満日、南高麗公民館主催による「春の野草を訪ねる会」に参加し、会員とともに一日を過ごした。

観察の手はじめに先ず小学校プールわきからのコースをとったのであるが、小学校裏手の土堤にヒロハアマナの花(ユリ科)白色六弁で外面に紫色のすじがある)を数多く観ることが出来た。これは自宅近く、やゝ湿り気のある土堤にも数株が毎年可憐な花を見せてはくれるもの、ここ程多くの株を見つけないことがなく、幸先よいスタートとなった。



①アマナ

飯能市史資料編植物を執筆するための調査は今から十一、二年も前のことであり、極めて不十分のものであるが、当時天覧山附近にはまだたく／＼様々な野草を観ることができたものである。

前出のフデリンドウの仲間、ハルリンドウ、ラン科のカキラ、クモキリソウ、ジガバチソウ、ユキノシタ科のウメバチソウ、リンドウ科のセンブリなど

アマナで想い起こすのはキバナアマナ(前者の類であるが、花は黄金色とでもいいたい黄である)が僅か一株であるが毎年咲いてくれる処がある。大河原地域の成る場所、花期の短かい故もあるが健在であることはいずれのことである。何時の年までも美しい花を見せて欲しいと願っている。

コースを更に山道にとり、登りつめた、やゝ平坦な開けた草地に出た。ここにはオミナエシの若苗やフデリンドウの蕾が春の陽を浴びて、やがて開くのも間近と思われた。



②フデリンドウ

カメラに収めることができたのであるが、今は殆んど見るのがなくなり残念である。

資料編に記したハンノウツツジ、

ハンノウツツジ何れも健在であることは喜ばしい。ハンノウツツジは現在その模式となる標品は個体が僅少であるが、市の花ツツジとの自然交配種が多く残っているようである。

一度失われた緑をよみがえらせることは、難事である。この景勝の地に森林浴に緑を求めて多くのハイカーが訪れることは結構なことであるが、その各人が何時までもこの地を大切に守るよう心掛けて欲しいものである。

現在進められている石造物調査のため、去る日西吾野駅から高山不動へと向かった。途中萩の平までの間の、群生したツクバネ(ヒヤクタン科)は開花間近と思われた。この低木には雌株・雄株の別があり、雌株の枝先に特異な実をつける。飯沼憲斎の草木図説に「実熟スルニ至テ花被ト共ニ不脱シテ、恰モ女兒所玩ノツクハネノ形ニ似タリ、故ニ汎ク其名ヲ稱ス」とある。竹司の料理の一品にも加えられている。

本来、半寄生植物で多くの針葉樹特にモミの根に多く寄生するのが見られる。

不動尊本堂の西側に一本のタラヨウ(モチノキ科)漢名盛羅樹がある。庭園・寺院によく栽植されている。都幾川村の慈光寺の境内には大木がある。これにも雌雄両株がある。その葉は長た円形、質厚く硬く乾かすか傷をつけると黒褐色に変化する裏面に極などで文字を記すと、その通りになる。

タラヨウは多葉羅樹で経文を書くインドの貝多羅樹の葉になぞらえたものであるという。山門入口右手前にモクゲンジ(ムクロジ科)があり二代目と



③ハンノウツツジ



## 古い時代を話し合おう

## 「観心会」

## 小谷野寛 一

観音寺の書記官長、島田正助氏は、家号を「かさ守」と言い「かさ守権衛」が祀られている。これを拝ましてもらいたい。寺で顔の合った、新井清壽・小川柳次郎・清水三重三の諸氏と方丈様を加わって本郷へ出掛けたい。おもしろい記事になりそうだと文化新聞も加わった。

この稲荷様は昔、随分さかっで、そのころ上げられた土の団子が今でもたくさんあってある。首の白い娘さんたちが、この土団子を持ってきて、「かさ」が治ったらしい団子を上げますと祈ったのだという。それで、「かさ守の権衛」と呼ばれたらしい。笠守でなく、「権（かさ）守」であった。権とは性情のことである。昔は神仏を頼むの掛け引きがあつて、治ったらどうこうするというのが多かった。「金の鳥居を上げますなぞありました。」などと落語の種となつていました。選挙のたるまの眼などもその口で、よっぽどのおえら方までやつている。いい気なものである。

話がそれってしまったが、この時の座敷でいろいろと昔の信仰の話など出た。で、誰言うとなく、「こういう古い話を集まると聞くと、昔を作った、というこゝとになり、その度に何か目標を立てて話し合おうということになり、とりあえず65才以上によつと決まると。月一回、中央公民館をお借りしようとなつて、以下の記録は、その何回目かの「子どもの遊びについて」の話合いの様子である。

きたない話  
「昔の子どもがよその地区の子どもへ悪態口をきく時『藁かき棒をひんなめた。』なんて言つたが、一体藁棒というものはあつたのかね？」  
「下肥の溜め桶を掻き回すのは見たことがある。『私も東北で見た。』木ツ端で尻を拭いた話は聞いた。『吾野で私は二人から聞いたから、事実あつたらしいね。』」  
「とにかく紙が無い時代だから、いろいろ工夫したんだね」

「名栗で竹のへらの話を聞いた」

「豆がらも使つたというが」

「へえ、豆がらが使えるのか」

「曲がらないから大変だろ」

「麻のから（おがら）でも拭いた」

「兼盛を『おがら連隊』などと」

悪口を言つたらしい。『その使」

つたおがらは取つておいて、川」

へ行つて箸を洗うようにさらざ」

らやつたというんだから恐れ入」

るね。『新聞といつたつて村で」

何軒しかとらないんだから、紙」

類は全く少なかった。『昔の人」

のケツはよほど丈夫だったんだ」

うだ、と一言言葉の裏側は、い」

つともさっぱりしていなかつたん」

だろがね。『そう、竹べらだ、」

おがらねというんでは、よく拭」

けるわけがないからね。『然し」

粗食時代は便の出がいいから、」

すばつといくんだよ、子ども」

尻や犬猫の尻と同じようにきつ」

ぱりと片がついたんだらう。』

『それが今じゃ、水洗便所の」

上をいって、湯が下からふき出」

して尻を洗うというんだから、

まったく河原でケツだね。』

『話は違つて昔の学校の便所

はおつりが来たね。』ああ、来

た来た、大変なもんだつた。受

け止め棒が、ちやんと真ん中

にあれば、そこがねらえるが、

時たま、横にいつているとペン

ヤンとくる。これはかりは尻で

加減のしようがない。』

んだという話もあつたね。『あ

あ、金出して契約したんだから

『それが只になつて、その次は

金をつけて汲んでもらうように

なつて世の中も変わったもんで

すよ。』

子どもの遊び

『きたない話もそろ／＼卒業

したらどう？』「細田さんがい

ろいろ絵を画いて来てくれたか

ら、これで話してもらいましょ

うか。『魚とりの道具といえ

ば、『ぶつたい』と『うけ』うけ

大型なのが、『鉢伏せ』これは

上げるのが楽しみなものだった

が、よく後師の棒でこざされた

ね。『夜とぼし』というものがあ

りました。急須のかけたのへ石

油を入れて口から紐を出して火

をつけたま。夜になると思つ

ちこつちにながやなんでもした

よ。『今は田にしさえ居ないん

だからね。』「ぶすを流してこつ

そり捕るといふのがありました

ね。大人は石炭なんか放りこん

だ。子どもはエゴの実をつぶし

て川に入れた。警察に知れたら

大変だ。』

『今は何を放りこんでも出て

来ませんね。居ないんだから』

『糞針を置いて、うなぎ鮫な

ど捕りました。朝行つて、白い

腹が見えると胸がどきん／＼し

てね。』「赤蛙はつかまると食べた

ひき蛙も食べた。ひき蛙のもの

には肉があつて一番うまかつた

が、蛙も蛇も骨ばかりで肉は無

いもんだね。『情気なしだ。』

『夏なんか一日川で遊んだ。』

あきると永田の子どもは大河原

へ行けば何も残っていない。『十

日ン夜』なんか、けんかするこ

とに決まっていた。四方、その

つもりで居たんだから……』

『これがまあ、昔の家庭学習

です。う。うちの周りでやつてい

くから、学校へはけんかをもち

越さな。』

『どうもいろ／＼発表してもし

らつて、ありがとうございま

した。又、次回にいろ／＼願いま

す。』

# 石造物戸籍簿への期待

坂口 和子

この四月から教育委員会の懸案だった市内石造物の悉皆調査が始められた。六十一年度で調査、六十二年で報告書刊行の予定と聞いている。調査に当たっては郷土史研究会の方々が積極的に協力され、現在五月末を第一期の期限として調査に歩き回っておられる。

悉皆調査ということになると飯能市の範囲はまことに広く、(県下最大)ほとんどが山地なので、調査に難儀することは日々にみえている。しかし、最近のように開発が進んでくると、路傍の石仏の処分が住民の悩みの種となる場合も出てきたり、土地転させたりということが起こってきた。その他、石仏ブームに乗っての盗難とか紛失も考えられてくると、祖先の文化遺産を次の世代に語り継ぎ、大切に守っていくためには、早急に、現存する石造物の戸籍簿を作っておく必要があると思われる。「石造物」と総称しているが、

この範囲も広く、石仏、石神のほかには板碑、五輪塔、宝篋印塔、各種供養塔の類、名塔、題目、真言塔、道しるべ、鳥居、狛犬、手洗石、力石、石軸、石灯籠、墓石と数えあげてみると、石で造られた信仰遺産は非常に多い。悉皆調査というからには、これら全部調査するのが当然のことながら、今年度は庶民信仰の対象となつたもの、供養を目的としたものに主力を注ぎ、墓石、鳥居、狛犬、記念碑の類は除外することになった。いずれ第二段として調査が行われることと思ふ。また、板碑については、五十二年度に悉皆調査が済み、立派な報告書ができていたので大変ありがたい。

板碑調査によれば、飯能市に現存する板碑は約千基という、数少ない中世資料のなかで、これだけの板碑が飯能地方に遺されていたこと、風雪に晒されながら五百年余の歳月を負つて、今なお私たちの手のなかにあるということは、何と素晴らしいことだろう。

所在地と管理者がわかり、その上に適切な保存法を考慮すれば、これらの文化財は確実に後世に受け継がれていく。その意味でも板碑悉皆調査は、大きな足跡をしるした。

時代は下がるが石造物も同じ運命を背負っている。今、飯能市に何基の石仏、石神が存在しているのか誰も知らない。推定も困難な状態である。しかし、丹念に調査に当ればその数を明らかにするこはほぼできるだろう。現在の所在地を確認し、記録することで、今後の盗難、紛失、移動を防ぎ、現状を把握することで、より以上の破損や磨滅を防ぐことも可能だ。また、



それらを写真で遺すことによつて、郷土の移り変わりをとらえる手がかかりともなるだろう。

思いがけない場所に、思いがけない石仏があつたときの嬉しさ。蓋に埋れた小さな石のかたまりが、かつては多くの人の祈りの対象であつたことを知つたときの驚きと怖れ。細々と続く道標をみつけたときの喜び。山中に忘れられた、苔むした五輪塔の神秘的な美しさ。何度見直しても首をかしげて考えさせられる謎の石像。かつての善男善女の形がほのみえてくるように思われるのだが、ぜひその形を表わしてほしいと願っている。

そしてまた、飯能の板碑の戸籍簿に石造物を重ねてみたいと考えている。中世板碑との関連がどの程度までつけられるのかに関心がある。中世板碑と近世石仏との間には、はっきりと断絶がある。その間隙を埋めるものが石造物のなかにあるのかどうか。また、板碑は墓石の前身と考へてもよいのだろうか。などの疑問を解明できたらと懇張っている。

石造物に関する情報やご助言など、委員の皆様から頂ければ大変ありがたい。

よつて飯能における近世の庶民信仰の様相が、いくらかでも明らかにかされるのではないかと、この期待を持っている。

江戸期を通じて現在に至るまでの、庶民信仰が包含するものは市広く、また、日本人としての深い根をもっているものと思われ、石のなかの一つの信仰の形が石仏、石神であつて、これを鳥瞰することができれば、信仰の形態や分布、そして、隣接する他地方との交流や関わりなども明らかになっていくのではなからうか。

## 視聴覚室を

野口 正一

どこの郷土館も展示物は豊富だが、どのように使われたものか、はっきりしないものも多いので、作業中の写真を掲示するとか、作業中の人形を置くとか、小中学生にも一目瞭然たらしめるようにしたい。

視聴覚室において、スライドやVTR等によって勉強出来るようにしたい。但し、多勢を相手にする講義は、市民会館の利用にまかせるとよい。

郷土史資料を出来るだけ公開して、特別閲覧室なり研究室を設けて、研修者の便宜をはかりたい。

マイコンを設置、資料の索引や時代考証等の便にそなえる。

## 昔が実感できる施設

吉田 茂

飯能市固有の、歴史・民俗・生産・文化が総合的にかつ、興味深く理解できるような施設であってほしい。しかし、単に古い資料を展示するだけでなく、先人の苦勞や生活の知恵といったものが、体験を通して実感できるか、体感を通して実感できているかを考える場を提供すべきであろう。したがって、手に

触れたり、使ったり、削ったりするコーナーは、ぜひとも必要である。

次には、市内各地区の特色ある生活様式と、それらとの交流の変遷、市を取り巻く地町村との関連から見られる生活圏の移り変わりも、考慮に入れたものでありたいと思う。

## こんな郷土館がほしい

市では、私達の長年の希望であった郷土館を、次の五ヶ年計画の中で建設することになり、現在までの発表では、天覧山下の覧山荘の位置を予定しているとのことです。郷土史関係の殿堂として、立派な施設をつくってもうらため、当員の参考に供するため、会員の皆さんのご意見を拝聴したいと思います。(編集部)

## 検索システムも

内野 博司

資料の保存、整理のための室を設置する、その際、スペースは広くとる。

体験室を設置し、伝統文化の継承・体験学習等に利用する。

資料の整理を充実し、その内容がすぐわかるように検索システムを検討する。

## 小中学生にも

沢田 克郎

この数年、方々の郷土館を見てきたが、雑然とあふれや、ただ並べたに過ぎない八百屋的なもの、個人のコレクションを雑多に展示したものの、個人のコレクションだが信州小布施のあかり博物館のようなタイプのもの、いろいろだが、系統別に設計段階で墨を引き、間取りを考えて、それが国史郷土史の中でどのような位置をしめるのか、

年寄りのノスタルジアを刺激するだけに終わらせないで、小学生・中学生にも歴史への目を開かせるものでありたいと、しかも未来の郷土のビジョンを描くようにありたいと欲ばりではあるが、

## 野外展示も

小山 誠三

覧山荘跡地につくことにによって、市内外の人が訪れ易い館にはなるでしょう。同じ敷地に図書館も、という噂がありま

す。図書館は別な所の方がよいと思います。

二、本館だけでは収蔵庫が小さいので、収蔵庫を分散させて、そこでも展示ができると面白いと思います。中身こそ問題ですがその体制づくり、基本的な論議、収集予算の増額など、今や直ちに行動すべきことです。

三、一度見ればおしまいという郷土館ではなくて、新しい企画を展示し易い機能を持たせてほしいものです。設計に充分なお金を、そして、多くの知恵を。四、郷土園の計画(市民公園基本計画)の中にも併せてしまわないうでほしい。

## 研究者の視点に

西野 長治

一、県立奥武蔵自然公園の玄関口に相応しく、飯能市のシンボルとなる施設、内容のもの。二、県西部地方を代表する充実した考古・歴史・民俗の総合資料館。併せて飯能地方の地質・動物・植物・地場産業等の展示もほしい。

三、市の文化財関係者、郷土史関係団体が自由に出入りし、利用できる拠点にしてほしい。会館・展示設備もほしい。四、遠足の児童・生徒観光客、その他来客者を親切に迎え、よ

い印象を与えるような運営がほしい。要望があれば、案内説明者をつけることも必要。

## だんく充実を

岩本 良三

一、施設について  
市当局も、財政事情がきびしいのに費用がかさむ各種の事業を多く抱えている。しかしゆえに超デラックスマなものは要求出来ない。当初は、質素なもので、貴重資料が盗まれない戸締りがついている程度の施設で、ガマンしてスタートするのがよいと思う。

二、展示について  
時々、展示品を入れかえるのがよいと思う。

三、利用について  
このような施設には、日曜・祭日に多くの人が訪れると思うので、休館日は平日にしてもらいたい。

## 勉強室もほしい

久保 昭子

飯能市の歴史、考古・民俗・産業等一目で紹介出来る展示室(写真・品物・書物)或いは、勉強室・スライドが出来るような部屋等いかででしょうか。

## 現代科学機器設置を

吉良 蘇月

一、施設について  
 覧山荘の位置で良い。ただし  
 家は、新築がのぞましい。

二、展示について  
 展示のケース、又は、場所は  
 低めに設計し、採光を充分にし  
 てほしい。

三、利用法について  
 郷土の発展に直結する様な  
 講習会を定時開催してほしい。

四、施設について  
 外來者より市民を第一に便  
 利を計り、若年者、婦人に特に呼  
 びかけて來館者の増加をはかる。

## 高床式で筏も

無記名氏

一、施設について  
 館内に、そして展示品にふき  
 わしく、鉄筋構造であっても、  
 和風の外觀で。

(1) 校倉造風の高床式、外面下式。  
 (2) 又は、信州・上州あたりの古  
 い民家に見られる、柱と貫を格  
 子状に見せた白壁造り。

(もろこし色も可)

色いづれも庇と外面下(ぬれえ  
 ん)は、なるべく深く取りたい。

二、展示品について  
 何か參觀者の評判になる、販  
 能らしい見世物(看板物)がほ  
 しい。

三、利用法について  
 直轄四五位のものを、電動で  
 廻し、水音・水車のさしみ音を  
 流し、バックに清流を聞く。

四、施設について  
 (1) 実物大の後(人形を乗せる)  
 (2) 流し、バックで水のせつら  
 ぎを流し、テイクでは緑と清流  
 をビデオ映写機で写し出した  
 い。

五、利用法について  
 (1) 建物の前庭には道祖神か、石  
 仏を建物のアークセラー式に置  
 きたい。(なるべく大きなもの)

## 周囲と調和・庭園展示

匿名氏

○天覧山等周辺の自然を構想の  
 中に含め、郷土館のほかに実習  
 施設、植物園等の設置を將來考  
 えたい。

○建物と周囲の環境に調和した  
 色彩とし、土地の有効利用から  
 地下一階、地上二階建、少なく  
 とも千二百坪の床面積がほしい。

○建物敷地の中に庭園・野外展  
 示を考える。  
 ○経費の節減から支障なき範囲  
 で自然採光をとり入れる。

○展示は歴史・民俗資料の他に  
 飯能を知る資料として動植物・  
 地理・産業関係も含める。

○展示のメインは飯能の特長を  
 示すものとして、西川村に關す  
 る資料を常時展示の中心とし、  
 国指定の文化財の模型もサブメ  
 インに入れる。

## 旧民家の建物を利用

清水 三重三

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○展示は歴史・民俗資料の他に  
 飯能を知る資料として動植物・  
 地理・産業関係も含める。

○展示のメインは飯能の特長を  
 示すものとして、西川村に關す  
 る資料を常時展示の中心とし、  
 国指定の文化財の模型もサブメ  
 インに入れる。

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について  
 ○施設について

その意味で現代につながる江  
 戸末期・明治・大正・昭和の史  
 実、出来事を重要視していただ  
 くよう提案します。

個人コレクション展示も  
 山岸雄司

○一階は大開を展示場とする  
 倉庫は完全品の一時保管場とす  
 る。

○二階は小展示場は、個人コレ  
 クション、又は、個展用に使用  
 し、広間は常設展示場とする。  
 ○地階は会議室・修理室・收藏  
 庫にあてる。

フッシュボタンスクリーンも  
 丸山 清

一、施設について  
 (1) 自然の採光が充分に入る建築

(2) 喫茶室・地元名物等売店設置。  
 (3) 展示箇所の説明プリント自動  
 販売機の設置。

(4) 例えは、「飯能戦争」等の大検  
 巻は、フッシュボタンを押すと  
 スクリーンに出る装置。

(5) 本庁舎・図書館等にある分散  
 史料等一室に集結させる。  
 (6) 研究室・学習室等講演・映写等  
 もでき、関係団体(例、郷土史研  
 究会)の拠点となるようにする。  
 (二、展示について  
 (1) 小学生を始め、学習に役立  
 つものにも力を入れる。

## 現代史につながる史実を

中里和夫

郷土を時系列でみれば、過去・  
 現在・未来に分けられ、郷土史  
 はその過去に属する分野ですが  
 たんに遺跡の出土品とか、史料  
 の展示に終るのではなく、現在  
 未来に關連つけた郷土史でもあ  
 ってほしいと思います。

具体的にいえば、過去の出来  
 事が歴史上の出来事として認知  
 され、現在に至るまで影響を及  
 ぼしているか、さらにそれを伝  
 統として残していくべきか、と  
 いうような視点で構成していく  
 のが、郷土史の郷土史として重  
 要だと思います。

三、利用方法  
①基本的には、入館料をとる。

②バス停に「郷土資料館」も入れる。

③日・祝祭日を始め、商店街休みの日も閉館する。

## 「つむぎ」 紬ぐ女

### 桑山和子

ふとしたことから、専門家で  
もない私が「飯能市史産業編」  
に織物の項をまとめねばならな  
くなった。先ず、心のどこかで  
「夕顔」の「つむぎ」の世界をふりき  
ると、史実として論理的に見る  
ことから始めた。必死になって  
資料を読み、統計表の数字を追  
った。そんな日々が二週間ほど  
続いた。

気がつくやうに、雲の間から一  
筋の光が差し込むやうに、明治に  
生きた男達の息づかいを感じ始  
めていた。私は、わく／＼しな  
がら、明治十五年頃の飯能の地  
図を広げ、当時の面影を知らう  
とした。

いつしか目は、花色染を考案  
した小川銀三郎、製糸業を起こ  
した大河原章平達の家々を追い  
求めた。この男達が生きた明治時代は、  
新しい価値観のもとに横浜が開  
港され、日本経済は大きく変わ

ろうとしていた。いいかえれば

山間に育った飯能の青年達には  
夢と希望が持てたのである。製  
糸業を殖産興業とする国の政策  
は、彼等に生きがいを与え、専  
業として栄えていった。新政  
府は勸業博覧会、共進会を催し、  
製品の向上を図った。彼等は競  
って出品し、多くの賞を得た。

日本経済の衝動として小さな努  
力が認められたからである。中  
には、変動する生糸相場に  
青春の血を燃やした。鎌倉街  
道を横浜へと走った者もいた。  
大河原章平など、その例である。

彼は飯能村字飯能の名主の家  
に生まれた。しかし、変動する  
生糸相場に野望は砕かれ、多く  
の財産を無くしてしまう。でも  
それでもいいだろう。移り変わ  
りはその運命。あの方丈記の中  
にも人生の無常が示されている  
ようだ。

あれから百年が経つ。大河原  
明子さんは静かに語った。

「章平さんは私の曾祖父で、  
明治十九年、三十八才で亡くな  
りました。郵便局を開いたり、  
生糸にも全財産をつぎ込んで……  
でも、結局失敗し、早死し、さ  
ぞ残念だったでしょう。私も当  
時手放した土地の証文を見ると、  
口惜し涙することもありますが、  
人生を真剣に生きた証薬だと思  
えば、すべてが許さしてしまう  
のかもしれないわ……………」

私はドラマを見る思いで、さ  
らに資料を読み続けた。ふと、  
織物業を支えていたのは男では  
なく、女ではなかったのだろうか  
か、と思うようになった。多分  
織物業を産業としてではなく、女  
の生き方、女性史というジャン  
ルで、とらえ始めていたからで  
ある。

飯能地方に製織の技術が伝わ  
ったのは、高麗王若光によって

である。その時代、蚕を育て、  
糸を紡ぎ、川辺で布を紡ぐのは、  
女の仕事となった。

万葉集東歌の中にも、そんな  
若い女達の息吹きが歌われてい  
る。源氏物語夕顔の巻にも、碓  
を打つ音の響きが描かれている。  
生活感覚として描かれている。  
しかし、暗黒の時代がやってく  
る。女の力を単に労働力とし  
かみなさない賞しさが、紬ぐ女  
を歴史に残る悲劇に追いやる。

大河原明子さんの家に、製糸  
習熟証のものが残っていた。  
(産業編、二二五頁参照)  
東京府下小石川区小石川同心  
町、土、渡川井久道三女、さだ、  
明治五年八月出生、一食拾円也  
右者今般我等三女さだ製糸習熟  
二差シ出候但半年季之義明治拾  
九年七月迄七年……………」

明治拾参年七月五日……………」  
大河原章平、とあるが、当時、没  
落士族の婦女達の安価な労働力  
が、家計を助け、日本経済を支  
えていた。このさだ女は、七年  
を十円で過ぐすかわたが、この  
時わずか八才の童女であった。

また、粟田良助著「大森日の  
夜」の中に「東吾野郷土史」を  
元にした次のような作品も流刑  
元政四年から十二年、流刑  
の地八丈島に流された伊三郎が  
赦免され、八丈女さよを連れて

戻って来た。悲劇は妻子が待ち  
うけていたことから始まる。妻  
の激しい憎悪に会い、さよは、  
八丈への思いを残して、この地  
で機織女としての生涯閉じる。  
(鳥から来た女より)

流人の鳥八丈が織るのも、あの黄色  
く沈んだ黄八丈が織られていた。  
この島の女さよは、嫉妬の波に  
もまれながら、飯能絹を織って  
死んでいった。黒潮の湯気の中  
波の音を耳に黄八丈を織って  
いた方が、幸せであったのだろう  
か……………」

女は、さまざま思いを布に  
織り込んでいく。そうして、女  
から女へと、日本民族の文化が  
受け継がれていく。

小山誠三さんのお宮参りの祝  
着は、母はなさんが袖いだ釧子  
織、はなさんの嫁入り支度は、  
そのまた母親の手織りの着物―  
経・緯・練なす織地に潜む女  
の歴史は、日本経済を支え、美  
しい文化を作り上げてきた。  
今また袖ぐ女は、現実の社会  
に、また文学の世界に染織工芸  
家として、自立した新しい女を  
演じ始めている。

色褪せた古文書との長い旅も、  
いよ／＼と終りに近づいてきた。  
声なき声を残して、すべてが  
今、私から通り過ぎようとして  
いる……………」



## 飯能郷土史研究会会則

- 第一条 この会は、飯能郷土史研究会と称し、事務所を飯能市立図書館内に置く。
- 第二条 この会は、郷土の歴史を研究し、市民文化の進展に資することを目的とする。
- 第三条 この会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (一) 郷土史の調査、研究
- (二) 講演会、展示会等の開催および出版物の刊行
- (三) その他、目的達成に必要な事項
- 第四条 この会は、会の趣旨に賛同する会員をもって構成する。
- 二、この会は、必要により専門部会をおくことができる。
- 第五条 この会に、次の役員をおく。
- 会長一名、副会長一名、理事若干名、監事一名、幹事若干名、役員としての任期は、二年とする。ただし、再任することができる。
- 三、この会に顧問をおくことができる。
- 補欠の役員としての任期は、前任者の残任期間とする。
- 第六条 役員は、次のとおりとする。
- 一、この会に顧問をおくことができる。
- 二、この会に顧問をおくことができる。
- 三、この会に顧問をおくことができる。
- 第七条 役員は、次の職務を行う。
- 会長は、この会を代表し、会議を主宰する。
- 副会長は、会長をたすけ、会長事故あるときは、その職務を代行する。
- 理事は、理事会を構成し、重要な会務を処理する。
- 監事は、会計を監査する。
- 幹事は、会長の命を受けて会務を処理する。
- 第八条 この会の会議を分けて、総会および理事大会とする。
- 一、総会は、毎年一回開催し、事業計画、予算および決算を審議する。

三、理事会は、必要により会長が招集し、重要事項を審議する。

第九条 この会の経費は、会費、補助金およびその他の収入をもってこれにあてる。

二、会費は、年額一、〇〇〇円とする。

第十条 この会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌三月三十一日に終わる。

第十一条 この会則は、昭和四十八年四月一日から施行する。

## 飯能郷土史研究会役員

(昭和六十・六十一年度)

- 顧問 古良憲夫、本橋幹治・小林雅二・双木利夫
- 会長 新井清壽
- 副会長 井上峰次、坂口和子
- 監事 小谷野寛一、山岸雄司
- 理事
- 飯能 織戸市郎、中村好男、新井幸一、加藤義雄、森田清次
- 加治 西野長治、小山誠三
- 精明 島田政一
- 二区 野口正一
- 南高麗 内野久喜
- 原市場 倉掛一男、西村一男、浅見茂
- 東吾野 増田時夫
- 吾野 清原恒夫、横田稲吉
- 幹事兼 赤田健一、浅見徳男、桑山和子

## 飯能市文化協会役員

- 理事 新井清壽、井上峰次
- 評議員 坂口和子、西野長治、浅見茂、岡野達雄、赤田健一

最近の  
郷土出版

- 東吾野真員集 同編集委員会編・発行 昭59・6
- 歌集 紺青の魚 町田アイ子著 昭60・4 飯能新聞社発行
- 川越橋楼 井上徳著 昭60・12 たなかや出版部発行
- 飯能市史資料編 地名・姓氏 市史編さん委員会編 昭61・3 飯能市発行
- 飯能市関係郷土資料目録・飯能市民の一般著作目録 飯能市立図書館編・発行 昭61・3
- 句集 たびじ 小柳睦著 昭61・4 小柳実発行
- 歌集 希望園 綾部光芳著 昭61・4 運書房発行
- 随筆 井護士漫歩 井口茂著 昭61・6 法字書院発行
- 写真集 奥武蔵やきもの紀行 藤野淳著 昭61・7 奥武蔵出版発行
- 随想 柏の木 野口朝雄著・発行 昭61・3
- 吾妻天満宮本間帳記念誌 沼部重著 昭61・6 加治神社発行



## 新入会員紹介(略敬称)

### 新入会員紹介(略敬称)

青木晃平(笠懸 西野長治紹介)

田島登美子(川寺) 全右

藤枝 進(川寺) 全右

大河原明子(山手町) 直接

大野公子(南町) 浅見徳男紹介

小川郁次郎(仲町)

小川 雄(仲町) 直接

桑山和子(飯能) 赤田健一紹介

野藤 淳(中山) 直接

野口 勲(小瀬) 桑山和子紹介

寺西容子(川寺) 赤田健一紹介

福与美津子(川寺) 桑山和子紹介

松本正枝(八幡町) 直接

森住初恵(川寺) 赤田健一紹介

山田和子(入間市野田) 直接

吉田保治(栗町) 小谷野寛一紹介

島田正助(飯能) 全右

大塚弘治(南町) 坂口和子紹介

西村りつ子(下赤工) 全右

高橋寿夫(中藤下郷) 直接

井口 茂(川寺) 中村好男紹介

双木久夫(新町) 全右

鈴木 護(川寺) 直接

関根美智子(前ヶ貫) 直接

浅見賢治(飯能) 直接

木村善三郎(中山) 直接

一川正久(南町) 木村善三郎紹介

市川恒子(柳町) 中村好男紹介

木村以和子(下加治) 直接

山影裕昭(矢蕨) 坂口和子紹介

## 会員 計 報

平沼恒夫さん

昭和60年9月26日逝去、45歳

写真の名手として知られ、勤務

の傍ら飯能焼や石仏等文化財を

撮られた。その一部は「飯能の

版碑」として結実し、文化協会

の功労賞を受けた。本会の理事

として活躍された。

榎田満寿さん

昭和61年2月24日急逝、80歳

若くして小学校の教師となり、

妻として母として、また社会人

として立派に人生を全うされた。

二月の研究会にも出席され先祖

の権田直助翁について研究した

いと述べられたばかりだった。

中村武雄さん

昭和61年7月9日逝去、87歳

林業家として活躍する傍ら戦前

東吾野村の収入役を長年勤めら

れ、地域の教育、経済向上に尽

する造詣深く、市の文化財保護

委員を勤められ、本会発足以来

長老的存在だった。

小柳 実さん

昭和61年7月19日逝去、52歳

小瀬戸に生まれ、順雅堂薬局に

## 編集 後 記

会報を二回出す計画でしたが遂に一回で年度を終りました。

郷土類のアンケートは、多くの

方々にご協力いただきました。

会の活性化をはかため、歴

史散歩と、研究発表会の試みは

概して好評でしたので今後も定

例の事業になりそうです。それ

にさらに例会を隔月に開く計画、

会務の分担、編集部若返り等

活気が出てまいりました。会員

の方々の一層のお力添えをお願

い申し上げます。

会員は現在一一〇人です。(A)

題 李・小谷野寛一

表紙写真・八木権信吉

### 郷土はんのう 第六号

発行日 昭和61年8月18日

発行所 飯能郷土史研究会

飯能市仲町二八一

飯能市立図書館内

印刷所 コパシ印刷

○9月7日 中央公民館で總會と研究会が催された。講師は、日本石仏協会理事、エッセイスト協会員でもある坂口和子氏、「石造物は何を語るか」と題して講演された。(写真上)

○はじめの試みである歴史散歩は、10月28日、東吾野と吾野に文化財をたずねた。マイクロボス2台に分乗した一行は、まず白子の長念寺の板碑と古文書を、次いで虎秀の福徳寺の阿弥陀堂と鉄仏三尊を拝観、秋の顔振峠で休憩の後、高山常楽院で本堂と軍荼利明王像、絹本不動明王画像を、坂石の法光寺で地藏菩薩像を拝観した。説明は井上峰次氏が担当され、参加者は42人であった。(写真右)

○2月11日に催された研究発表会は、出席者32人、全員が自分の研究について、10分間ずつ発表された。